

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	恋ふこと・思ふこと：『万葉集』におけるその連関
Sub Title	
Author	松田, 浩(Matsuda, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1998
Jtitle	三田國文 No.27 (1998. 3) ,p.1- 10
JaLC DOI	10.14991/002.19980300-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980300-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19980300-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 恋ふこと・思ふこと

——『万葉集』におけるその連関——

松田 浩

## 一 はじめに

現代語において恋人と思人とはともに同じ人を指す。それぞ  
れの語が照射する対象は、同じ人物であることは間違いない。

そもそも、「思ふ」という語は、ものを頭の中で考え構成し、  
また感情を抱くことであるが、万葉の昔から「思ふ」は、我々  
から見て、恋をするといった意味に用いられている。

吾が命の全けむ限り忘れめやいや日にけには念益十万  
(四・五九五)

一首は、笠女郎が家持に贈った歌であるが、仮に訳出してみれ  
ば、「私の命のある限り忘れることがあろうか。いよいよ日毎  
に思いの増してゆくことはあつても。」といった意味になろう  
が、この「念益(思ひ増す)」は、矢張り、恋しさが募るとい  
う意味で解釈ができる。勿論、これはこの歌のみに当てはまる  
ことではなく、集中には、

珠衣のさゝるしづみ家の妹にもの言はず来にて思金津  
裳(四・五〇三)

意字の海の潮干の渦かたむちの片念おもひ尔思おもひ哉や將去道やゆかむのながてを(四・  
五三六)

皆人を寝よとの鐘は打つなれど君きみ乎念おも者寝おねかてぬかも  
(四・六〇七)

など、それぞれ、現代語訳を試みれば、「思金津裳(思ひかね  
つも)」「(四・五〇三)は「恋しさに堪えられない」、「思哉將行  
(思ひや行かむ)」「(四・五六三)は「恋しく思いながら行くの  
だろうか」、「君乎之念者(君をし思へば)」「(四・六〇七)は  
「あなたを恋しく思うので」という意味である」と了解できる。

我々にとって、「恋しく思う」と解釈できると思われる「思ふ」  
は存外に多い。

こひすればわが身は影となりにけりさりとて人に添はぬも  
のゆへ(古今・五二八)

夕月夜あかとき闇の朝影にあが身はなりぬ汝な乎念おも金丹かたね  
(万葉・一一・二六六四)

右の二首における「影」とは、細く褰れた様を言っている。  
前者は、恋するその苦しみによって影となるのであり、後者は

思うその苦しみによってそれとなるのである。古今集よみ人らずに現れた「恋す」は万葉集十一巻二六四番の歌に見られる「思ふ」と同じ様な文脈の中にある。ここに見られる「思ふ」は矢張り「恋する思いに堪えかねて」、ということにならう。

ただし、この万葉人が使う「思ふ」は、本当に「恋しいと思う」という意味で解釈されてよいものであるか。両者が語を違えていることは、その意味における差違をも要求していると思わなくてはなるまい。

いかにして戀止物序天地の神を折れど吾八思益(一三・三三〇六)

この一首には、「恋ひ」・「思ひ」の両語が用いられている。一首は、旧岩波古典大系では「どうしたら恋がやむものでしょう。天地の神に祈っても私はいよいよ恋心がまします。」と訳されている。これに従えば、訳の上では両者の差異は見えないということになるが、「恋ひ」と「思ひ」とが一首の中に使い分けられていることは、「思ひ」が単に「恋ひ」の変わりではないことを示そう。では、恋の歌のなかに現れる「思ふ」とは、一体どのような意味を負っているのか、ということが問題となる。

本稿では、一見我々に同じ様な意味内容を持つように了解される「恋ふ」「思ふ」の両語の差違を明らかにすることを目的とした上で、それぞれの動作・状態がどのような相関を持つのかという点を考察してみたい。それには先ず、「恋ふ」の動作・状態のいかなるものであったかを考えねばならない。

## 二 「恋ふ」こと

万葉集における「恋ふ」は、大野晋氏によれば、

ある、ひとりの異性に気持ちも身もひかれる意。「君に恋

ひ」のように助詞ニをうけるのが奈良時代の普通の語法。

これは古代人が「恋」を、「異性ヲ求める」こととなく、「異性ニひかれる」受け身のことと見ていたことを示す。

と説明される。

さて、この「くニ恋ふ」に関して大野晋氏の説く「受け身の」として見ていた」とは、

日本語における受身とは、自分自身がその動作に積極的に関与しないにもかかわらず、その動作が自然の成り行きとして成立してしまうことをいう。「言ひのしらる」「先だたれにたれば」「霞に立ちこめられて」など、すべて自分からはのしり、先だち、立ちこめる動作に積極的に関与しないに関わらず、それらの動作・状態が自分に関して成立してしまったと述べるものである。

といった意味合いで言われる。確かに「くニ恋ふ」という表現は、自己の意識的行為というよりは、より受動的に見え、「受け身のこと」という把握ができる。

ただし、ここで注意せねばならぬのは、万葉人「恋ふ」に用いられる助詞ニが、「霞に立ちこめられて」に見られるような、「受身・使役の対象」を表す助詞ニと全く同一のものとして良いかという点である。受身の対象をあらわす助詞ニは、「霞にたちこめられ」や「人に知らえじ(七・一三三〇)」のよう

に、その能動動作主に接続する。

青山を横切る雲の著ろくわれと咲まして人に知らぬな(四・六八八)

言問はぬ木すら紫陽花諸茅等が練の村戸にあざむかえけり

(四・七七三)

白髪し子らも生ひなばかくの如若けむ子らに罵らえかぬめや(一六・三七九三)

これらの例に見られる助詞ニは、その能動的動作主に接続している。六七八番歌では、「知る」という動作を行うのが「人」であり、七七三番歌において「あざむく」のは「練の村戸」であり、三七九三番歌で「罵る」のは「若けむ子ら」である。これらの受け身の表現では、確かに自分の意志とは関わりなく成り立つてしまう動作ではあるが、その動作主はあくまで「〜」で示されている。翻つて、「恋ふ」という動詞の動作主は、

…わが恋ふる君 玉ならば 手に巻き持ちて 衣ならば：

(二・一五〇)

雲隠り行方を無みとわが恋ふる月をや君がみまく欲りする(六・九八四)

とあって、あくまでも自分である。自分自身が「恋ふ」のである。そこで、この助詞ニが如何なるものであつたかを考えるに、

(A) あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに(二・一〇七)

(B) …うち靡く 春さり来れば 櫻花 木の暗茂に 松風・池浪たち …(三・二六〇)

(C) この頃の暁露にわが屋前の萩の下葉は色づきにけり

(二〇・二二八二)

(D) 露霜の寒き夕の秋風にもみちにけりも妻梨の木は

(二〇・二一八九)

の用例が参考になる。これらは動作・状態(白抜き傍点)の原因・由来をとく助詞ニである。ここにおける「〜」は動詞の動作主となるのではなく、どこまでもそれを引き起こす原因としてある。(A)の例では、動作主はあくまでも「われ」であり「しづくに」と表現される「しづく」によって「われ」が「濡れ」るのである。(B)の例も同じく、「松風に」によって「池浪」が立つ。(C)では「暁露に」よって、「萩の下葉」が「色づく」のであり、(D)では「秋風に」よって「妻梨の木」が「もみつ」のである。

右のような例と同様に「〜に恋ふ」は、「恋ふ」という動作・状態とその原因をあらわす「〜」であると解釈できよう。伊藤博氏は、「万葉集において、動詞「恋ふ」が、ある対象を要求するときは、それが、人間、人間以外たるかを問わず、「〜に恋ふ」といった<sup>⑤</sup>という見地から、動作の対象を表す「〜」が例外的なものであることを述べ、「に」は、あきらかに「を」とは違うのであつた。それは動作の目的を示すのではなくて原因を示すものであつた。「恋ふ」の対象というよりは根元を示すものが「に」なのであつた。<sup>⑥</sup>と結論づけられている。確かに例外として「〜を恋ふ」という表現はあることは否定し切れぬものの、首肯すべき論であらう。

このように見れば、凡そ、古代の「恋ふ」は、動作・状態の原因・由来・動機などを表す助詞ニによつて導かれる動詞であつ

て、ある原因によって発動する動作（状態）であつたらうことが想像できる。

では、助詞ニによつて導かれる原因は何か。勿論「君に恋ふ」のであれば、「君」が原因である訳だが、より具体的には如何なる「君に」なのか、という問題は、「恋ふ」ことが、必ず相手と離れているときにのみ現れるということを鑑みれば、推して知ることができよう。

勅穂積皇子遣近江志賀山寺時、但馬皇女御作歌一首

遅れ居て恋ひつつあらずは追ひしかむ道の阿廻に標結へわが背（二・一一五）

柿本朝臣麻呂妻依羅娘子、与入麻呂相別歌一首  
な思ひそと君は言へども逢はむ何時と知りてかわが恋ひざらむ（二・一四〇）

田部忌寸櫛子任大宰府時歌四首（の内）  
置きて行かば妹恋ひむかも敷栲の黒髪しきて長きこの夜を（四・四九四）

三方沙彌歌一首  
衣手の別く今夜より妹もわれもいたく恋ひむな逢ふよしを無み（四・五〇八）

「恋ふ」ことは、会えない前提をもつてはじまる。つまり、「恋ふ」ことは、「眼前にいないところのあなた（あなたがいないという原因）」によつて起こる動作・状態と取ることができ。そのような原因によつて促される（自発的なる）動作（もしくは状態）が「恋ふ」ということになる。

ただ、忘れてはならぬのは、少ないながらも古代の「恋ふ」には、「くを」を受けるものがあるということである。助詞ヲは文中にあつて動作の対象をあらわす。そこには単に原因によつての自発的行為でなく、より積極的・能動的な「恋ふ」が例外的とはいえ存在したことを示しているとも解釈できよう。「くを恋ふ」と見える用例の内、幾つかは間投助詞的な接続助詞のヲとして、また誤写であるとして、伊藤博氏によつて解かれた。しかし猶、格助詞的に動作の対象を求めるヲが接続されていると見ざるを得ない「恋ふ」は存在する。

(A) 高麗剣己が心から外のみに見つや君乎恋ひ渡りなむ（二・二九八三）

(B) 家にして我は恋ひむな印南野の浅茅が上に照りし月夜乎（七・一一七九）

(A) の例では、「恋ひ渡りなむ」の集中の用例は一一例で、全ては結句にあらわれて「——や…恋ひ渡りなむ」を形成する。内、助詞ヲ若しくは助詞ニを用いた例は四例で、

(1) 紫の帯の結びも解きもみずもとなや妹尔恋ひ渡りなむ（二・二九七四）

(2) 神さぶる荒津の崎に寄する波間無くや伊毛尔恋ひ渡りなむ（一五・三六六〇）

(3) 奥山の櫓が花の名のごとやしくしく伎美尔恋ひ渡りなむ（二〇・四四七六）

(4) 高麗剣己が心から外のみに見つや君乎恋ひ渡りなむ（二・二九八三）

となり、全一一例の内、「くを恋ふ」が三例、「くを恋ふ」が一

例ということになる。用例としては確かに「く恋ふ」が優勢ではあるが、全四例の中では数の差も決定的とまでは言えまい。これらの内容を見較べてみたい。今見るに、問題となる「君を恋ふ」という表現を持つ（4）の歌だけが、「己が心から」という積極的・主体的修飾を持ち得ているのである。そのようなことがこの例外が出てくる一因でもあろうか。

（B）の歌に関しては、説明を待たないであらう。これは、「印南野の浅茅が上に照りにし月」を、家に帰ってから「恋ふ」だろうというのである。してみれば、これも「くを恋ふ」という例外であると考えられる。

一体、恋ふことは、受動的・自発的行為であった。併し、対象を要求する助詞ヲが少数ながら現れることは、その深淵に何らかの能動性質との連関をも持っていたのではなからうか。この問題に関しては、古代の恋における「思ふ」を見ていく上で再度見ていくこととする。

### 三 「思ふ」こと

既に指摘したごとく、万葉人の語彙「思ふ」は、慕う・恋慕するという意味を包含するように見える。併し、この恋の語彙として用いられる「思ふ」は、助詞「くを」を伴う従属句に接続するという点において、「恋ふ」とは対蹠を為すものである。

さにつらふ妹乎念登霞たつ春日もくれに恋ひ渡るかも

（一〇・一九一一）

伊母乎於毛比眠の寐らえぬに暁の朝霧隠り雁がねぞ鳴く

（一五・三六六五）

伊母乎於毛比眠の寐らえぬに秋の野にさ雄鹿鳴きつ妻思ひかねて（一五・三六七八）

伎美乎於毛比吾が恋ひまきはあらたまの立つ月毎に避ける日もあらじ（一五・三六八三）

「思ふ」は、その動作を向ける対象を明らかにする目的格の助詞ヲをともなう対象を持つている。つまり、動作主が能動的に対象（くヲ）への働きかけを行っている。この点で「思ふ」は意識的行為であるといつてよい。これは「思ふ」に自発の助動詞「ゆ」が接続して「思ほゆ」の語を形成し、それによつて初めて、非意識的行為——自発——となることから確認できよう。

山川の水陰に生ふる山菅の止まずも妹は思ほゆるかも（二・二八六二）

吾妹子が笑ひ眉引面影にかかりてもとな思ほゆるかも（二・二九〇〇）

韓人の衣染むとふ紫の情に染みて思ほゆるかも（四・五六九）

もししきの大宮人は多かれど情に乗りて思ほゆる妹（四・六九二）

恋の語彙「思ふ」と「恋ふ」との差異を、更に検証してみた。両者は伴に「一死ぬ」という語を接続して、「思ひ死ぬ」「恋ひ死ぬ」という語を形成する。それぞれは「思ふ故に死んでしまう」「恋ふ故に死んでしまう」という意味をなす。今、具体的に集中にその用例を見ると、

「恋ひ死ぬ」（一〇例）

孤悲死牟 時は何せむ生ける日のためこそ妹を見まく欲り

すれ(四・五六〇)  
恋死六 そこも同じそ何せむに人目他言痛みわがせむ  
(四・七四八)

恋死 恋死耶 玉梓の路行く人の言も告げなく(一一・  
二二七〇)

恋死 恋死 吾妹子が吾家の門を過ぎて行くらむ(一  
一・二四〇一)

恋死 後は何せむわが命生ける日にこそ見まく欲りすれ  
(一一・二五九二)

人目多み直に逢はずてけだしくも 吾恋死者 誰が名なら  
むも(一一・三一〇五)

吾妹子に 安我古非思奈婆 そわへかも神に負ほせむ情知  
らずて(一四・三五六六)

わが屋戸の松の葉見つつ吾待たむ早帰りませ 古非之奈奴  
刀尔(一五・三七七四)

他国は住み悪しとそいふすむやけく早帰りませ 古非之奈  
奴刀尔(一五・三七七八)

古非之奈婆 恋ひも死ねとや霍公鳥もの思ふ時に来鳴きと  
響むる(一五・三七八〇)

「思ひ死ぬ」(二例)  
言ふ言の恐き国そ紅の色にな出でそ念死友(四・六八三)

の如く、「一死ぬ」への接続は、「恋ひ死ぬ」という語に大きな  
偏向があることが判る。

さて、この「一死ぬ」に対して、『万葉集』には、より死へ  
の積極的な行為をなす、「命をかけて」という意味合いの言葉

がある。それは「息の緒に」という語で表される。因みに今、  
辞典を翻れば、

いきのを【息緒・気緒】(名詞) 命をいう。ヲはものを結  
びつける紐。息の緒とは命の継続の象徴的な表現で、たい  
てい、イキノヲニ思フ・イキノヲニ恋フという慣用形であ  
られるが、命がけに思う・命がけに恋ふの意である。

とある。そこで、この「息の緒に」という語の用例を集中に見  
ると、

「息の緒に——思う」一〇例

今は吾は侘びそ死にける氣乃緒尔念ひし君をゆるさく思へ  
ば(四・六四四)

氣緒尔念へる吾を山ぢさの花にか君が移ろひぬらむ(七・  
一三六〇)

：氣緒尔 吾が念ふ君は うつせみの 世の人なれば：  
(八・一四五三)

：氣緒尔 吾が念ふ妹に 真澄鏡 清き月夜に ただひと  
め：(八・一五〇七)

息緒吾は念へど人目多みこそ 吹く風にあらばしはしは  
逢ふべきものを(一一・二三五九)

氣緒尔妹をし念へば年月の行くらむ別も思ほえぬかも(一  
一・二五三六)

生緒尔念へば苦し玉の緒の絶えて乱れな知らば知るとも  
(一一・二七八八)

朝霜の消ぬべくのみや時無しに思ひ渡らむ氣之緒尔為而  
(一一・三〇四五)

氣緒ル吾が念ふ君は鶏が鳴く東方の坂を今日か越ゆらむ  
(一一・三一・九四)

白雪の降りしく山を越え行かむ君をぞもとな伊吉能乎尔念  
ふ(一九・四二・八一)

「息の緒に——恋ふ」(三例)

なかなか絶つとし言はばかくばかり氣緒ル四而吾恋ひめ  
やも(四・六八一)

…人知れず もとなそ恋ふる 氣之緒丹四天(一三・三二二  
五五)

…吾が恋ふる千重の一重も 人知れず もとなや恋ひむ  
氣之緒尔為而(一三・三二二)

他への接続「息づく・嘆く」(各一例)

氣緒乎吾が息衝きし妹すらを人妻なりと聞けば悲しも  
(一一・三二二)

…向かひ立ち 袖振り交はし伊吉能乎尔嘆かす子ら…(一  
八・四二二)

以上の例を見るに、「息の緒に」という語は「思ふ(念ふ)」へ  
偏っていることが決る。

「一死ぬ」という語が、「恋ひ」に偏り、それとは対蹠的な  
命をかけてという表現、「息の緒に」が「思ふ」へと偏ること  
は、「思ふ」ということが、より積極的に自己の意志による発  
動であることの左証とならう。「恋ひ死ぬ」という、いわば病  
のごとき原因で命を落とすのではなく、自己の命をかけて「思  
ふ」という行為をなす訳である。

右に見た用例の違いからも「思ふ」は「恋ふ」に比べて能動

的に相手を慕う動作であることと見ることができ、では、両者  
の關係は如何なるものであるのか。二者が一首に同時に現れ、  
その因果關係を表している場合を見ておきたい。

(A) 古非都追母をらむとすれど木綿間山隠れし伎美乎於  
母比可祢都母(一四・三四七五)

(B) このころは君乎於毛布等すすもなき古非能美之都々  
音のみしそ泣く(一五・三七六八)

(C) さにつらふ妹乎念登霞たつ春日もくれに恋度可母  
(一〇・一九一一)

(A) の歌は、「恋いつつもいようとするのだが、あなたを思  
うに絶えられない」という意にならう。すると、「恋ふ」とい  
う行為は「君を思ふ」という行為で保証されている關係と見る  
ことができる。「君を思ふ」のに絶えて、「思ひ」つづけること  
ができるならば、「恋ひ」つづ居ることは可能なのである。つ  
まり、「君を思ふ」ことで「恋ひつづもを」ることが全うでき  
るのである。(B) の歌は「君を思ふと」が条件として設定さ  
れた上で、そのことによつて「すべもなき恋」をしようの  
である。ここに見られる「恋」には、「君を思ふ」という原因  
によつて起きてしまうという印象がある。(C) にあげた例も、  
矢張り妹を「思ふ」と「恋ひ渡る」のである。又、先に挙げた  
(D) いかにして戀止物序天地の神を祈れど吾八思益  
(一三・三三〇六)

も、このように見れば、「恋」を止めたいのに、「思ひ」が増す、  
つまり、「思ひ」を根拠として「恋ふ」ことが続いて了うこと  
を言っている。



以上は「恋ふ」という動作・状態が、「思ふ」という行為によつて引き起こされるものであることをあらわそう。

他人よりは妹そも悪しき故非毛奈久あらしものを於毛波  
之米都追（一五・三七三七）

この宅守の一首は、万葉人における、恋することと思うことの差違を明瞭に表そう。「他人よりは妹こそ悪しき」というのは、妹さえいなければ、私は恋をすることもなかつたのに、ということである。しかし、妹は宅守に恋をさせるのではない。恋することは宅守の側に帰属する行為である。妹は彼（宅守）に「思ふ」ことを強いるのである。つまり、ここからは、妹が我を「思ひ」させねば、私の「恋ふ」は起きないという因果関係が承知される。これが宅守の単なる独りよがりでないことは、（A）（D）のような歌の存在を見れば納得し得る。

このように「恋ふ」を誘因する「思ふ」が見られるわけであるが、その意味内容は如何なるものであつたのが問題となる。それを考えるには、この「思ふ」という行為の発動する状況を知る必要がある。

意宇の海の潮干の鴻の片念ひに思ひや行かむ道のながてを  
（四・五三六）

一首は、門部王の出雲にあつた頃の恋の歌であるが、この歌の作歌事情は左註によつて詳しく知ることが出来る。

右、門部王、任出雲守時、娶部内娘子也。未幾幾時、  
既絶往来。累月之後、更起愛心。仍作此詞贈致娘  
子。

右に見る如く、「片念ひ」の歌が作られる契機は、「絶往来」と

なつて「愛心」が起きることにある。他に「思ひ」を起こす動機を集中の歌の中に探せば、

：昼はも 日のことごと 夜はも 夜のことごと 立ちて  
居て 念ひぞわがする 逢はぬ兒ゆゑに（三・三七二）

：人多に 国には満ちて あぢ群の 去来は行けど わが  
恋ふる 君にしあらねば 昼は 日の暮るるまで 夜は  
夜の明るる極み 念ひつつ 眠も寝がてにと（四・四八五）

あらたまの月立までに来まさねば夢にし見つつ思ひそ吾が  
せし（八・一六二〇）

などを見ることが出来る。三七二番歌は逢つてくれぬ兒故に思うのであり、四八五番歌・一六二〇番歌ともに、矢張り、逢えぬことが前提となつてゐることを確認できる。「思ふ」ことは、「恋ふ」がそうであつたのと同様、相手が眼前にいない場合に行われる行為であると見て良い。

また、

念ひにし餘りにしかば為方を無み出でてそ行きしその門を  
見に（一一・二五五一）

念ひつつをれば苦しもぬばたまの夜にいたらば吾こそ行か  
ぬ（一二・二九三）

これらの「思ひ」に惹起される行為は、恋人に直に会うことである。「思ひ」に絶えかねて、恋人の家の門を見に出かける。「思ひ」の苦しさに、自から会いに行く。

天の河渡瀬ごとに思ひつつ来しくもしるし逢へらく念へば  
（一〇・二〇七四）

この「思ふ」ことの効験は、「逢へ」たことにある。

思ひは、相手と会うことを要求をする。「思ふ」ことが、「恋ふ」ことに比べてより積極的な意味合いを持つということを考えれば、その眼目は、自己が相手と共にありたいと希求すること——相手を自己の内にあらしめ現実にも斯くあらしめたいという思い——にある。

「思ふ」の原義は、内田賢徳氏によれば、「古事記」国生みの条、伊邪那岐命の言葉に「国土を生み成さむと<sup>おもふ</sup>爲」とある如く、現実を準備し、内包すること、つまり行為や現実への可能態としてあるものごとを意味する。神は現実への可能態を内に思い、それを現実<sup>②</sup>に顕在せしめる。だが、神の発話における「思ふ」は、常に現実との紐帯を固くしているのに対し、人の内に想起される「思ひ」は、常に現実との矛盾の内にある。情には思ひ渡れど縁を無み外のみにして嘆きぞわがする

(四・七一四)

「思ひ渡」つているのに、きつかけが無く逢うことが出来ない。「思ふ」ことは逢うことを求め、人は逢えない現実とその「思ひ」の間隙に苦しみ、嘆く。それ故に妹・背を思ふ心は乱れるのである。

否と言はば強ひめやわが背背の根の念ひ乱れて恋ひつつも

あらむ(四・六七九)

朝髪<sup>①</sup>の念ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれぞ夢に見えける

(四・七二四)

解衣の思ひ乱れて恋ふれどもなぞながゆると問ふ人もなき

(一一・二六二〇)

玉葛さきくいまさね山菅の思ひ乱れて恋ひつつ待たむ(一一・三二〇四)

以上見てきた如く、恋の世界における「くを思ふ」は、相手を自己の内<sup>①</sup>に定立し、現実にも共にありたいと希求する行為であったといえる。

#### 四 「恋ふ」ことと「思ふ」こと

先に見た如くこの「思ひ」は「恋ひ」を誘引する。その「恋ふ」とは、内面における希求と現実との間隙に起因する行為のように見える。つまり、「君を思ふ」ことは、君を希求することであり、「君に恋ふ」ことは、その思う相手であるところの君が眼前にいないこと——眼前にいない私の思う君——を原因として現象する。かくて、「思ひ」は乱れ、「恋ひ」は惹起されるのである。

ただし、「思ふ」と「恋ふ」との連関は、単に「思ふ」から「恋ふ」への不可逆的な流れのみで捉えられるのではない。集中には、左記のような一首も見出すことが出来る。

い<sup>①</sup>で何かここだはなはだ利心の失するまで念ふ恋ゆるゑにこそ(一一・二四〇〇)

ここでは、「恋」が「思ひ」の原因として現れている。

「思ふ」は「恋ふ」ことを誘引し、「恋ふ」ことは更に「思ふ」ことを増幅する。両者は、「思ふ」ことが現実との隙間を埋め尽くすまで、つまりは妹背が直に出会ひ「思ひ」が和ぐその時まで、不可分の関係にあり続け、相互作用を繰り返すのであろう。

最後に、「くを恋ふ」の用例が、少数ながらも集中に見えることについてであるが、これは「恋ふ」「思ふ」の両者が不可分であり、更に密接に作用しあっていることを鑑みれば、そこに幾ばくかの「くを」という積極的表現へと続く要素が既に用意されていたことをも考えることが出来るよう。平安以降に現れる「くを恋ふ」というような恋の契機は、斯様な「恋ふ」「思ふ」の連絡を以って考えることが可能ではないかとも思われてくるのである。

#### 注

- (1) 例えば、最近のものでは伊藤博氏『万葉集釋注 二』(集英社・平成八年)に、「私の命の続くかぎり、あのお方を忘れることがあろうか。日ましますます恋しさの募つてゆくことはあつても」と訳出されている。
- (2) 岩波書店・昭和三五年
- (3) 大野晋『岩波古語辞典』(岩波書店・昭和四九年)
- (4) 同(3)『基本助詞解説』
- (5) 伊藤博『「恋ふ」の世界』『万葉集の表現と方法』(塙書房・昭和五一年)所収
- (6) 同(5)
- (7) 同(5)
- (8) 「恋ひ渡りなむ」の用例は、他に巻六・九九七、巻七・一三三三、巻一・二五九六或本歌、巻二・二九六三・三〇七二、巻一七・四〇一五、巻二〇・四四四一の七例が検出できるが、ここには「くを」「くに」という表現はない。
- (9) 勿論、これが例外、であることには変わりなく、「わがころからくを恋ふ」という用例を見いだすことはできる。(巻二・三〇二五、巻一三・三二七)
- (10) 例えば『岩波古語辞典』では、「恋ひ死に」を「恋い焦がれて死

ぬ。「思ひ死に」を「恋い慕うあまり死ぬ」と説明している。

- (11) 上代語辞典編集委員会編『時代別国語大辞典(上代編)』(三省堂・昭和五八年)

- (12) 内田賢徳「見る・見ゆ」と「思ふ・思ほゆ」——『萬葉集』におけるその相関——『萬葉』第一一五号・昭和五八年(まつだ ひろし)